

繋がりにつながれて、真夜中

アニストを待ちながら

興才・七里圭監督×主演・井之脇海

井之脇海 木龍麻生 大友一生 斉藤陽一郎 澁谷麻美

プロデューサー: 池野雅也 監督: 七里圭 監修: 脚本: 七里圭 照明: 高橋哲也 録音: 松野 泉 美術: 黄永昌 音楽: 宇波 拓 編集: 宮島竜治 山田佑介 制作・配給: 合同会社インディペンデントフィルム

出られない図書館を舞台に描く

目に見えないものに紐付けられた若者たちの物語



彼らは出てくれないのか?

ガラスの向こうは明けない夜。自動ドアはいつでも開くが、どういうわけか外には出られない。どこにも行けない理不尽な状況で、居合わせた男女5人は、なぜか芝居の稽古に興じ始める。まるで、幽閉されたことに甘んずるかのように。そこにはいない誰か、不在の視線を意識しなから……。

このおかしな物語は、私たちが経験したコロナ禍や、今や当たり前になったオンライン、SNSでの非対面コミュニケーションの奇妙さを暗示している。**20世紀の不条理は、すでにリアル。** 私たちは、いつも不在の相手につながれて、待たされて、くたひれている。サミュエル・ベケットの有名戯曲を思わせる題名に、その意図が込められている。

映画の舞台となるのは、**世界的な建築家の隈研吾が手掛けた、村上春樹ライブラリー**。村上文学をイメージした**迷宮的空間で全編撮影**されたことも、見どころの一つだ。本作は、この村上春樹ライブラリー(早稲田大学国際文学館)の開館記念映画として製作された短編をもとに、**約1時間の劇場公開**(ディレクターズカット)版として完成された作品である。

主演は、若手実力派の**井之脇海**。『東京ソナタ』(08)の天才ピアノ少年、『ミュージコフィリア』(21)の現代音楽に目覚める学生を更新するように、本作でも吹替なしのピアノ演奏を披露している。共演には、『福田村事件』(23)『熱のあとに』(24)など話題作の出演が続く**木竜麻生**とともに、『カソクテッサン』(20)『劇場版美しい彼・eternal』(23)の**大友一生**を抜擢。そして、『王国』(あるいはその家について)『(23)』等で鮮烈な印象を残す**澁谷麻美**、故青山真治監督作品で常連の**斉藤陽一郎**がわきを固める。

監督は、**今年デビュー20周年を迎える七里圭**。

劇場初作品の『のんきな姉さん』(04)で注目され、カルト的な人気を誇る『眠り姫』(07)『サラウンドリマスター版16』や『DUBHOUSE』(12)、『音から作る映画』プロジェクト(14、18)、『背吉増造×空間現代』(22)など、**常に先鋭的な作品を生み出してきた異才**である。唯一無二のフィルムグラフィアーを重ねる七里にとって、

<https://keishichiri.com/pianist>

本作は久々の劇場映画となる。

図書館という空間が演劇によって異化されるのを、この映画を見る者は目の当たりする。そこで演劇のリハーサルが繰り返されること。しかも真夜中に。

岡田利規

チェルフィッチュ主宰 / 演劇作家 / 小説家

STORY
目覚めるとそこは真夜中の図書館だった。瞬介(井之脇海)が倒れていた階段の両側には、吹き抜ける天井まで高く伸びた本棚がそびえる。扉という扉を開けて外に出てみるが、なぜか館内に戻ってしまう、途方に暮れる瞬介。やがて瞬介は、旧友の行人(大友一生)と貴織(木竜麻生)に再会。三人は大学時代の演劇仲間だった。他にも、中年男の出目(斉藤陽一郎)や謎の女絵美(澁谷麻美)もいる。行人は、この状況を逆手にとって、かつて上演できなかった芝居の稽古を始める。それは、行人が作・演するはずだった「ピアニストを待ちながら」。しかし、瞬介には気になることがあった。確か、行人は死んだはずでは……?

プロデューサー:熊野雅忠 | 企画:土田 環 | ラインプロデューサー:徳本雅彦 | 撮影:澁谷五郎 | 照明:高橋直也 | 録音:松野 黄 永昌 | 助監督:島井雄人
ヘアメイク:永江三千子 | スタylist:小笠原吉忠 | スチール:本多晃子 | 劇中歌曲:鈴木一平 | 脚本協力:山本浩貴 | 振付指導:神村 忠 | 音楽:宇波 拓
編集:宮島真治、山田祐介 | 宣伝:平井万里子 | 宣伝デザイン:鈴木規子 | 予告編制作:日原明夫 | WEBデザイン:植田智道
監修:行政書士法人東京国際経営法務事務所 | 配給協力:チャーム・ポイント | 製作:合同会社インフィニテントフィルム / 早稲田大学国際文学館

横浜シネマリン

上映開始 24.11.16 ~

045-341-3180